

# 希望

## この手に

沖縄の貧困・子どものいま



「1年の時は、社長出勤していただいたのね」と、今は毎朝7時に登校する少女をからかしながらもうれしそうに笑う下地雅美さん(17)

住環境の総合支援を展開するレキオスホールディングス(那覇市、官保文雄社長)は、創業した30年前から、賃貸住宅で家賃の未払いが生じた場合、賃借人に代わり立て替え払いを行う「家賃保証」を手掛ける。宜保社長自身が母子

### レキオスホールディングス

### 第3部 ①

## 家賃未払い、社が立て替え

# 生活再建へ寄り添う

家庭で育ち、母が家を借りる際、保証人探しに苦労したことから「ひとり親の苦勞をなくそう」と始めた事業だ。

未払い発生時に同社が家賃を立て替えることで、家主の経済面での不安が軽減されるほか、賃借人も生計を立て直す猶予が得られる。さらに担当者には困窮する賃借人と向き合い、家賃滞納に陥った背景

を進学したが、学校は休みがちで部屋は友達のためり場になつていった。

親は仕事で島外に出ており連絡がつかない。下地さんは親戚に連絡を試みる一方で、少女を食事に誘い、暮らしぶりや学校生活について尋ねた。少女は親元を離れた寂しさや料理、洗濯などを一人でやる生活に疲れ、学校に

め、少女のおぼと連絡を取り合つて本島内の親戚と同居できるよう転居の手続きを進めた。就学のための貸し付け制度の書類もそろえた。滞納分の家賃の精算後も定期的に連絡を取り、関わりを途絶えさせないよう心掛けた。

転居後、少女は生活が落ち着き休まず登校するようになった。高3になった今も、毎

を探り、自立に向けた支援に乗り出す。事業のテーマは「救済と再生」。寄り添うことで、賃借人の生活再建につなげている。

「昨年の冬、「レキオス」の事業本部本部長、下地雅美さん(40)は滞納が3カ月続く部屋を訪ねた。暮らしていたのは15歳の少女。既に電気もガスも止められていた。少女は離島から本島の高校に

行く気力をなくしていた。「学校をやめたい」と繰り返す少女に「高校だけは卒業しないと。後悔するよ」。会う度に強い口調で諭し、本島に住む少女の兄を訪ねて就学を支えるよう説得した。自宅に少女を泊めて「飯の作り方を教え、ケーキ店を営む友人に頼み込んで短期のアルバイトをさせたこともあった。

少女の生活を安定させるため、少女のおぼと連絡を取り合つて本島内の親戚と同居できるよう転居の手続きを進めた。就学のための貸し付け制度の書類もそろえた。滞納分の家賃の精算後も定期的に連絡を取り、関わりを途絶えさせないよう心掛けた。

朝7時に家を出て十数分離れた高校に通う。5月、食事を共にした下地さんに近況を報告した少女は「やめたいと思ってたけど、頑張つて学校に通つてみると楽しかった。あの時、下地さんがいてくれた良かった」と感謝の言葉を口にしました。

下地さんは「家賃滞納の現場は総じて貧困が広がっている。だが、責めても仕方がない」と思う実態をいくつも見てきた」と話す。夜逃げ同然で部屋を後にした一家。子どもや高齢者が放置された事例もあった。どんな思いで部屋を出たのか。どの立場で支援すればいいのか。思いを巡らせ迷いながらも「私たちは取り立て屋ではない。彼らに寄り添う努力を惜しまない」と。社員教育で下地さんは必ずこう口にする。

沖縄大学の島村聡准教授(社会福祉士)は「生活困窮者の居住環境を整えるという同社の支え方は、子どもの貧困問題を考える上でも大事な視点だ。同社の動きに着目して同業の企業も取り組んでほしい」と指摘した。

5月下旬から「県外編」を掲載します。

◇ シンポジウム「希望この手に」に「沖縄の貧困・子どものいま」が、20日午後6時半から那覇市のパレット市民劇場で開かれる。入場無料だが整理券が必要。問い合わせは社会部まで。